

## 「なんというしあわせ」

2005.4.24 赤羽聖書教会主日礼拝説教

都上りの歌。

ダビデによる

1. 見よ。

兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。

2. それは頭の上にそそがれたとうい油のようだ。

それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。

3. それはまたシオンの山々におけるヘルモンの露にも似ている。

主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

## 説教

先週は家庭礼拝の重要性をお話ししました。そこで、ただ家庭礼拝の話をするだけではちょっと足りないのではないかということで、今日から何回かのシリーズで、家庭のことについてお話ししたいと思います。これも、私がこの教会に赴任して以来、祈禱会では話しましたが、主日礼拝の講壇からは話した記憶がないので、家庭の問題について少しお話ししようと思います。

この詩篇133篇の表題は「都上りの歌」とあります。これは、イスラエルの人々が、(過越の祭りなどを祝うため)エルサレムへ巡礼に上る際に歌ったものと言われます。あるいは、バビロン補囚を経てエルサレムに帰還する人々が、ダビデの統一王朝時代と重ね合わせて(「ダビデによる」とある)詠んだ歌だとも言われますが、いずれにせよ、各地方へバラバラに散らされているイスラエルの人々が神の都エルサレムに続々と集まって来ることの喜びと感動を単純に歌にしたもの、とすることができます。

アブラハムの時代にまでさかのぼるならば、イスラエルはもともと一つの家族でありました。そのアブラハムの一族が、増えに増えて、一つの国家を形成するに至ります。そして、この王国は、ダビデ王の時代に全盛期を迎えるものの、その後は南北に分裂し、遂にはバビロンに滅ぼされて崩壊し、人々は完全にバラバラに散らされてしまうのでした。これを私たちが実感できるわかりやすい言い方で表現するならば、一つの家族が、夫婦離婚して子供たちは父と母のもとに各々二分される、さらには分裂した二つの家庭もそれぞれが何らかの理由で崩壊して、親も子も完全に散り散りバラバラになってしまった、ということになるでしょう。

このようなアブラハム一家の悲惨な歴史を思う時、それが祭りの際であれ、はたまたエルサレム帰還の際であれ、彼らが一つとなって集まる時の喜びは、まさに「なんというしあわせ、なんという楽しさ」であったでしょうか。

1. 見よ。

兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。

「見よ。

なんというしあわせ、  
なんという楽しさであろう。」

「ヒネ・マー・トープ」これで、そのままイスラエルの讚美歌になって今でも歌われているようです。（「マー・トープ」、「マー・ナイーム」 = 「なんというしあわせ、なんという楽しさ」）「マー」は「なんという」、「マー！何という！」という感嘆の意味です。「トープ」は「良い、すばらしい、この上なく最高の状態」、「『主はすばらしい』の『すばらしい』」です。「主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。」（詩篇 34:8）の「すばらしさ」が、「トープ」です。「ナイーム」はルツの姑「ナオミ」がここから名を付けました。それは「楽しい」「嬉しい」「喜ばしい」という意味です。つまり、この詩人は、イスラエルが自分の国に帰る喜び、「兄弟たちが一つになって共に住む」幸いを、「なんというしあわせ、なんという楽しさ」、「なんというすばらしさ、なんという喜び」という風に、この上ない最上の表現で表現したのです。

次の2節を見ると、詩人は、家庭が回復して一つとなる祝福を、大祭司任職の際に注がれる「とうとい油」にたとえます。

## 2 . それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。

それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。

それは「頭の上にそそがれたとうとい油」のようだ。

日本語の翻訳では「流れて....流れしたたる」と訳し分けられていますが、本文では、「~の上に流れ下り、~の上に流れ下る」と同じ表現です。さらに3節にも「~の上に流れ下る」となっていて、神さまの祝福が天から地上へと流れ下るありさまが、具体的に、しかも生き生きと表現されています。それは、一度、大祭司の頭に注がれるや、大祭司を生かして、イスラエル十二部族を生かすものとなるし、シオンの山々に注がれるや、イスラエルの人々にいのちをもたらすものとなっていく、というわけです。これが、「兄弟たちが一つになって共に住む」幸いです。「家族が共に住む」喜びです。それは、天から流れ下って、人々にいのちを与えて、人を生かすのです。家族の祝福、家庭の祝福は、天から下る祝福です。神さまから下る祝福です。天から下って人を生かす祝福なのです。

具体的に見ていきましょう。

## 2 . それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。

それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。

2節で、詩人は、「兄弟たちが一つになって共に住む」祝福、家庭の祝福を、大祭司任職の油にたとえています。

それは、大祭司の頭に注がれて、ひげに「流れしたたり」、さらには衣のえりにまで「流れしたたり」、イスラエル十二部族をあらわす十二の宝石がはめられた胸当てにまで流れしたたる、と言うのです。既に出エジプト記で学んだ通り、この任職の油が注がれてこそ、大祭司の働きは生きたものとなります。神と人ともに仕えるものとなります。この任職の油が注がれてこそ、大祭司は神の栄光

をあらゆる働きをなすことができるようになるのです。そして、大祭司が罪贖われることにより、イスラエル十二部族も罪贖われ、きよい御霊が注がれて、神の栄光をあらゆることができるようになります。ですから、神と人々に仕えて神の栄光をあらゆるのに必要なのは、この任職の油です。人の願いや努力によらず、ただ神さまの恵みの油が必要なのです。そして、この「神さまの恵みの油」こそ、「兄弟たちが一つになって共に住む」ことにある、というのです。このように、「家族が共に住む」ことは、「神さまの恵みの油」です。それは、「大祭司任職の油」です。その恵みの油は、私たちの内を清めて、神と人々に仕えることを得させます。私たちを神の霊に満たして、神の栄光をあらゆるものとしてくれるのです。

同様に、3節を見ると、詩人は、家庭が回復して一つとなる祝福を「シオンの山々におりるヘルモンの露」にたとえます。

### 3 . それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。 主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

ヘルモン山は、パレスチナの北方にある海拔 2800 メートルを越える最高峰で、長さが 32 キロにも及ぶ連山です。山頂は一年中雪に覆われ、雪解けの水は豊富で、ここがヨルダン川の源流となってガリラヤ湖に注ぎ、イスラエル全土を潤します。冷凍設備が未発達の際は、氷をレバノン地方などに供給したため、氷の山と呼ばれました。連山の低い気温で急激に冷やされた大気中の水分が、大量の露となって山をうるおします。そして、明け方に生じるこの大量の露が、イスラエル人にとって、まさに「いのちの水」となりました。古代人は、年間雨量の少ない荒野に於いて、朝ごとに生じる大量の露を集めて農業をしました。だから、神さまからくだされるこの恵みの「露」は、荒野に於いてもイスラエル人を生かす、まさに「いのちの祝福」でありました。水がなければ、人は生きていくことはできません。水のない荒野の中で、人はどうやって生きていくことができるでしょうか。普通は、常識で考えて、生きていくことはできません。でも、このヘルモン山が発する大量の「ヘルモンの露」があれば、人々は生存できるどころか、農業までやって穀物野菜を栽培することができるのです。驚くべき神さまの恵みです。「シオンの山々におりる」とあります。「シオンの山々」は通常エルサレムのまわりの山々を意味しますが、その語源は「荒野」「乾燥地帯」を意味します。神の恵みの「露」である「ヘルモンの露」は、朝明けと共に大量に水のない「荒野」に流れ下って「荒野」を潤すのです。そして、詩人は、これが「兄弟たちが共に住む」喜びであると言います。それは、乾ききった荒野を潤す喜びです。死の現実のいのちをもたらず喜びです。死ぬしかない過酷な環境の中で、人を生かす、「いのちの祝福」なのです。

家庭のすばらしさとは、こういうすばらしさです。家庭の喜びとは、こういう喜びです。それは、荒野を潤す喜びです。水のない、死の現実の、いのちをもたらず喜びです。どんなに過酷な環境に於いても、生きる力を与える喜びです。それはまさに「いのちの祝福」です。人を生かす祝福です。さらには、その人ひとりを生かすのみならず、油注がれたその人を通して、家族全体、民族全体、国家全体を生かし、世界に「いのちの祝福」をもたらず祝福です。みなさん、家庭というのは、そういうものなんです。「ヘルモンの露」のように、私たちを生かして「いのちの祝福」をもたらしめます。「大祭司任職の油」のように、自分のみならず、自分を通して全世界が生かされていきます。「いのちの祝福」に満ちているのです。神さまが、とこしえに「いのちの祝福」をお命じになりました。家庭は、「あらゆるすばらしさ」に満ちています。この上ない最高の「喜び」に満ちているんです。生き生きとした活力、

喜び、楽しさ、いのちに、あらゆる神さまの祝福に満ちているんです。少なくとも、「いのちの祝福」に満ちているはずなんです。

神さまは人を創造なさった時、男と女に創造し、すなわち家庭を創造して、彼らを「祝福」したとあります。さらに、彼らを祝福して、彼らに何とお命じになったのでしょうか。「生めよ、増えよ、地を満たせ！」とおっしゃいました。最初の家庭は、生き生きと活力に満ちて、「生んで、増やして、地を満たして」、それでも余りある活力を止めることができず、「地を従える」ことにまで費やしたと言うのです。これが家庭です。家庭の力です。家庭の祝福です。こういう活力を現実を感じる如果不能とするならば、それは神さまが悪いのではなくて、人が悪いのです。私たちの罪が、家庭の祝福を止めているからです。しかし、人の罪の現実がそう感じさせないとはいえ、本来、家庭に注がれた神さまの祝福とは、人を生かし、全世界を生かす祝福であるのです。

ならば、どうするか？家庭とは本来そういうものであることを自覚して、あきらめてはなりません、回復に努めましょう。神さまに心を向けましょう。共に祈りましょう。共に聖書から教えられて、聖書から、正しい家庭像、正しい家庭のあり方を学んで、それを実践しましょう。神を愛し、人を愛しましょう。そこに、私たちの家庭の祝福が回復していく、第一歩があります。みなさんのご家庭が、神さまの祝福を回復して、いのちの祝福に満ち、全世界に祝福をもたらすものとなるよう祈ります。